

はやり病と夏見廃寺 日本書紀完成1300年

日本書紀からの流行病 主な事例

崇神天皇の時代 国内に疫病多く、民の半分以上が死ぬ。

天照大神・倭大国魂を天皇の御殿にお祀りした。

結果 神の勢いを畏れ、共に住むのに不安 天照大神を豊鋤入姫命に託し倭笠縫村に祀った。

倭迹迹日百襲姫命に神懸かりさせる。 結果 大物主神を祭れ 我子の大田田根子に祀らせる。

崇神天皇 9年春3月15日 天皇の夢の中 墨坂神・大坂神を祀る。

10年「民を導く根本は教化にある。」 災害は全て無くなった。 次は遠国の人々を

12年春3月11日 勝利宣言 天皇の名を 御肇国天皇（はつくにしらすすめらみこと）

垂仁天皇の時代

伊勢の祭祀

天照大神を豊鋤入姫命から離して倭姫命に託す。

倭姫命は大神を鎮座する場所を探す。 伊勢国に至る。

伊賀国への御巡幸 市守宮（いちもりのみや） 宇流富志禰神社 蛭子神社

天照大神をお祀りする斎王 もとは流行病を防ぐ為だった。

欽明天皇（第29代、在位539～571?）時代

『日本書紀』では552年に仏教伝来とされている。しかし538年という説が有力。

『日本書紀』では、仏教伝来により、大和朝廷の有力豪族崇仏派（蘇我氏）と廃仏派（物部氏、中臣氏）の対立。

敏達天皇（第30代、在位572～585?）の時

疫病が発生。崇仏・廃仏が大きく関わった。

天皇と大連は疱瘡に冒された。疱瘡で死ぬ者増加 みな仏像を焼いた罪という。天皇は病悪化で崩御

天然痘の流行

用明天皇（第31代:585～587?）

崇仏派・廃仏派が決定的な中になる。 天皇は疱瘡が悪化して崩御す。

崇峻天皇（第32代:587～592?）

2年7月 物部大連守屋を滅ぼすことを謀る 戦が始まる 厩戸皇子の活躍

文武天皇 (第 42 代:697~ 707)

続日本紀に記述 疫病大流行は 698 年~713 年まで 15 年間

2 年 (698) 多紀皇女を伊勢神宮に齋宮

大宝元年 (701) 2 月泉内親王を伊勢の齋王

天武天皇は最初から最後まで疫病流行

元明天皇 (第 43 代: 707~ 715) 疫病が蔓延

710 年 平城京へ遷都

文武天皇から始まった疾病は元明天皇の代まで 15 年間もの大流行であった。

聖武天皇 (第 45 代 724~749) 天平の大疫病

天平 7 (735~738) 奈良時代の天然痘流行 当時の総人口の 25-35%の 100 万-150 万人が感染により死亡 政権中枢に大きな被害

天平 7 年 5 月に災害や異変がしきりに多い。朕の不徳のいたすところ責任は自分にある。

伊勢神宮に幣帛使を出す。

8 世紀 干ばつと飢餓 文武~聖武天皇の時代

701 年 4 月 雨乞い 6 月にも雨乞い

705 年 6 月 ひでり 雨乞いしても雨降らない

706 年 6 月 雨乞い

719 年 9 月 六道諸国に雨乞い

722 年 7 月 稲の苗が実らず

730 年 6 月 干ばつ 畿内四カ国 田畑巡検

732 年 6 月 日照り田作りせず しばしば雨乞い 降らず

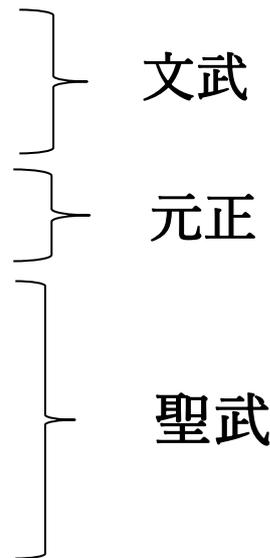
735 年 11 月 穀物の実りが悪い

736 年 11 月 秋の収穫が最悪

737 年 5 月 疫病と干ばつが同時に発生

740 年代から 750 年代 雨乞い日照りはあるが頻度低下

763 年 5 月 日照り 以降また日照りが続く



聖武天皇の実行したこと 天平 9 年

畿内・七道諸国に僧尼は沐浴し、最勝王経転読 殺生を禁断、人民に免税の優遇処置

天下泰平のため宮中十五箇所で僧 700 人に大般若経・最勝王経を転読 400 人の出家

畿内・七道諸国に 578 人の出家

8 月には 2,376 人の僧に真綿・塩を施与

11 月に諸国の社を宮繕

天平 10 年 5 月 神宝を伊勢大神宮に奉らせた

聖武天皇 関東（伊勢・美濃）行幸 天平12年10月 朕は思うところ有しばらく関東行幸
10月30日 伊賀国名張郡に到着 11月1日安保に宿泊
11月2日 伊勢国一志郡河口頓宮に到着

天平13年（741）2月の詔

諸国はそれぞれ七重塔一基を造り合わせて金光明最勝王経と妙法蓮華経各十部を写経させる
国司は国分寺を莊嚴に飾り、いつも清潔に保つように

を出し、私の思いを民に知らせなさい。そこで人民のため、全国の神宮修造、一丈六尺の釈迦仏
を全国に造らせ、七重塔を建造

保ち国毎に国分寺・国分尼寺を建て寺を金光明四天王護国之寺とせよ

両寺に僧20人尼10人とする。毎月8日に金光明最勝王経を転読。魚獵・殺生せよ

天平15年（743）10月 聖武天皇の詔 盧舎那仏という大仏を造営する詔

夏見廃寺の塔・講堂もその中に入る

毛原廃寺は多数の僧侶が必要なため、僧の育成の場所が必要

それでは夏見廃寺 創建の 金堂は

白鳳地震は、天武天皇13年（684年）巨大地震

14年（685）3月「国々で家毎に仏舎をつくり仏像と経典を置いて礼拝供養せよ」

薬師寺⇒皇后の病氣平癒の祈願

夏見廃寺⇒天災を祈るため各国で建築 持統8年（694）には金堂完成

奈良時代に寺院建築ラッシュ

国分寺・国分尼寺 毛原廃寺 夏見廃寺の増築（塔・講堂）について

軒平瓦で検討 古代学研究224 「毛原廃寺式軒平瓦の再検討」 藤原宏 高見省三 山田猛

岩屋瓦窯から瓦の供給

毛原廃寺 なぜ建設したのか

毛原廃寺は、文献に一切ありません。七堂伽藍の大寺院を建てたのかはナゾ

夏見廃寺の講堂や塔と同じ模様の軒平瓦が出土。その瓦の絵に似た瓦が平城京にも出土。

また伊賀国分寺、三田寺廃寺、大山田村の鳳凰廃寺からも出土。

大勢の僧侶が必要だった。僧の育成の場所が必要 僧侶は多くのお経を暗記する必要があった。

昔から災害には 神社・寺だのみだった。

疾病も感染症の場合に何年か経てば自然免疫が出来る。

神仏だのみは、しかたがなかった。

おしまい